令和2年度　大田区立東六郷小学校　自己評価　報告書

令和3年3月12日

○　本校の概要

・学校規模　児童数344名　13学級　教員数　20名
・校内研究主題 「思考力を深め、伝え合う力を高める理科・生活科学習」

○　自己評価及び学校関係者評価の結果の概要と改善策

大項目	目標	取組内容	取組指標	取組評価	目標に対する成果指標		成果評価	これまでの取組 今後の改善策	学校関係者記入欄 評価	人数	コメント
プラン1　未来社会を創造的に生きる子供の育成	コミュニケーション能力、情報活用能力、ともに生きる力等、これからの社会の変化にしなやかに対応する子どもの力と自信を身に付けます。	外国語教育指導員を効果的に活用し、外国の方々とのコミュニケーション能力の育成等を図っている。	4：「おおむねできた」と全教員が回答した。 3：80%以上が回答した。 2：60%以上が回答した。 1：60%未満であった。	3	年度末児童アンケートの「授業のときはいつもがんばっている」で「とても思う」「思う」と回答した児童の割合	4：90%以上 3：80%以上 2：70%以上 1：70%未満	3	これまでに、本校児童の実態を踏まえた授業改善プランを作成し、そのプランに沿った授業づくりを行ってきた。外国語教育指導員と担任が連携を図り、コミュニケーションを中心とした外国語への慣れ親しみ、会話力、異文化への関心を向上させた。今年スピーチなども取り入れ、さらにコミュニケーション能力の育成を図った。来年度は書くこともさらに充実させていく。 ICTの活用は、タブレット1人1台化に向け、全学年で昨年以上に活用した。プログラミング教育の実践も外部企業と連携をして行った。4～6年生では、日々の学習の中で効果的に活用され活用頻度も上がった。今後は、緊急時以外でも児童との双方向のやり取りの日常化を検討していく。今年度、体力テストは実施しなかったが、本校の課題である、握力と立ち幅跳びにつうて、校内で計測を実施し、改善を図った。結果は、両種目ともに記録の向上につながった。また学校の決まりとして25分休みには必ず外に出て体を動かして遊ぶことも徹底し、コロナ禍ではあるが、体力の向上を図った。次年度は、コオーディネーショントレーニングを活用し、児童の体力の向上を図っていく。 学習指導講師による、個別学習を行い集中して学習に取り組む時間を設け、習熟度の向上に努めた。	A B C D	3 4	今期はコロナ禍で学校に行くことができなかった。先生方を信頼するしかないと思います。 実際に取組に対して、できているのかいないのか、学校に行っていないので何とも言えないです。申し訳ありません。 評価Bにしたのはそうであってほしいという意味で付けさせていただきました。 子どもの育成について ・コロナ禍の最中、子どもたちの体力の減退が懸念されます。 ・家庭内でも外出は避けるようにしています。 ・従来の子どもの遊びが阻害されているので、家庭における体力維持の方策を考慮、実践することを望んでいます。 コロナ禍の中、大変な状況だと思います。教職員の皆様の御苦労をお察しいたします。今、できることを頑張ってください。
		論理的、科学的な思考力の育成を目指し、「おおたのものづくり」を生かした体験活動や理数授業等を実施する。	4：全教員が行った。 3：80%以上の教員が行った。 2：60%以上の教員が行った。 1：60%未満であった。	2							
		学力の定着と学ぶ意欲の伸長を目指し、ICT機器を活用した授業を実施する。	4：設置教室を使用する全正規教員が週1回以上活用した。 3：80%以上の正規教員が週1回以上活用した。 2：60%以上の正規教員が週1回以上活用した。 1：60%未満であった。	3							
		他者の人権を尊重する人権教育の推進を目指し、人権教育資料等を活用した授業を実施する。	4：対象となる全学級（全教員）で行った。 3：80%以上で行った。 2：60%以上で行った。 1：60%未満であった。	3							
		体力テストの結果を踏まえ体力向上全体計画を作成し、計画に基づいた体育指導や「一校一取組」運動や「一学級一実践」運動を実践する。	4：全教員で行った。 3：80%以上の教員で行った。 2：60%以上の教員で行った。 1：60%未満であった。	2							
プラン2　学力の向上	児童・生徒一人ひとりの学ぶ意欲を高め、確かな学力を定着させます。	学習カルテを基に児童・生徒と面談し、一人ひとりの学習のつまずきや学習方法について、指導する。	4：対象となる全学級（全教員）で行った。 3：80%以上で行った。 2：60%以上で行った。 1：60%未満であった。	2	年度末児童アンケートの「授業中勉強がよくわかりますか」で「よくわかる」「わかる」と回答した児童の割合	4：90%以上 3：80%以上 2：70%以上 1：70%未満	3	今年度の児童の学習の実態をもとに、授業改善プランを作成した。各教科主任をリーダーにして、全教員がプランに沿って授業づくりを行ってきた。 また、学習に困難さを感じている児童については、土曜授業日と金曜の放課後に補習を計画し、講師、専科教員も含めた全教員が指導に当たった。今年度は補習の回数を増やした。その際に学習カルテも活用し、個別の学習状況に合わせた指導を行った。その結果、年度末児童アンケートの「6月のころよりも、勉強(べんきょう)がよくわかるようになった。」の問いに「よくわかる」「わかる」と回答した児童の割合が約9割であった。 一方で「授業中は集中していつも真剣に取り組んでいますか」の問いに肯定的な回答をした児童が昨年度よりも5%と上昇した。学習規律が整い、学ぶ姿勢が身に付いてきたことが言える。 今後は、ICT機器のさらなる活用や教員が授業のアイデアを活発に出し合うことで、授業改善に努め、児童にとって学習意欲の高まる授業を実践する。「宿題や自主学習など毎日家庭学習に取り組んでいますか」の問いは、昨年度よりも肯定的な回答が3%微増した。継続して地道に習慣化していく必要がある。今後は、日々の授業でICT機器をさらに効果的に使用するとともに、1人1台のタブレットの有効活用の方法を検討し、学校での学習と家庭学習の充実を	A B C D	3 4	学力の向上 コロナ禍のため、通常の授業スタイルの改善が必要となり、ソーシャルディスタンスを保つ授業は、学力の向上につながっているのではないかと推測します。（少数化し、回数を増やす）
		算数・数学到達度をステップ学習チェックシートで児童・生徒、保護者に知らせる。	4:学期に2～3回知らせた。 3：学期毎に知らせた。 2：年度間に1回は知らせた。 1：お知らせできなかった。	3							
		学習指導講師等による算数・数学・英語の補習を実施する。	4：対象児童・生徒への出席を全教員が働きかけた。 3：80%以上の教員が働きかけた。 2：60%以上の教員が働きかけた。 1：60%以下の教員が働きかけた。	3							
		授業改善推進プランを、授業に生かす。	4：「おおむねできた」と全教員が回答した。 3：80%以上が回答した。 2：60%以上が回答した。 1：60%未満であった。	3							
		問題解決的な学習を取り入れ、児童が主体的に学習をし、学習の過程や結果について交流を行うことができる授業を取り入れる。	4：「おおむねできた」と全教員が回答した。 3：80%以上が回答した。 2：60%以上が回答した。 1：60%未満であった。	3							
プラン3　豊かな心の育	子ども一人ひとりの正義感や自己肯定感、自己有用感などを高めるとともに、自他の生命を尊重する心を育成するなど、未来への希望に満ちた豊かな心を	小中一貫による教育の視点に立った生活指導の充実により、社会のルールや学校のきまりなどを守ろうとする意識を高める。	4：全教員が行った。 3：80%以上の教員が行った。 2：60%以上の教員が行った。 1：60%未満であった。	3	年度末児童アンケートの「きまりを守って生活していますか」で「きちんと守っている」「だいたい守っている」と回答した児童の割合	4：90%以上 3：80%以上 2：70%以上	3	児童の間で起こる問題に対して、迅速な対応をした。学年、管理職と連携を取り児童の指導に当たった。今年度は児童の話を聞く機会を多くとり児童理解に努めた。児童の情報を共有する機会を毎週とり、学校全体で組織的に解決を図ることができた。また、大田区の学校生活調査やいじめ防止アンケートなどの結果を有効に活用することで、さらに深く児童理解をした。問題に対しては保護者にも迅速に伝え、電話ではなく直接面談することで、具体的な方策を共に考え解決を図ることができた。 学級経営においては、今年度も「東六スタイル」を全校のきまりと位置付けて指導徹底を図り、継続して範意識の向上に努めた。「きまりを守って生活していますか」の問いへの肯定的な回答が82%と昨年度と同じパーセンテージを維持した。次年度は9割以上の児童が自信をもって約束を守れていると回答できるよう指導をさらに徹底していく。 「先生の話や友達の発表のときは相手の目を見てだまって最後まで聞いて	A B C	3 4	心の育成 通常と異なる生活が求められている昨今である。ストレスがたまることが多いと思う。非行に走らないよう注意が大事。家庭と学校との連携が不可欠と考える。
		道徳教育推進教師を講師とした研修や、国、都及び区の資料を活用した授業等を行う等道徳指導充実のための取組を行う。	4：学期に2～3回（年間6回）以上行った。 3：学期に1回（年間3回）以上行った。 2：年度間に1回以上行った。 1：実施しなかった。	2							
		学校生活調査（メンタルヘルスチェック）の結果よりストレス症状のみられる児童・生徒に対して組織的に対応する。	4：「組織的対応ができた」と全教員が回答した。 3：80%以上の教員が回答した。 2：60%以上の教員が回答した。 1：60%未満であった。	3							
		学校いじめ防止基本方針に沿って、いじめの未然防止、早期発見等のための取組を実施する。	4：「組織的対応ができた」と全教員が回答した。 3：80%以上の教員が回答した。 2：60%以上の教員が回答した。 1：60%未満であった。	2							
			4：必要な事案に対して必ず会議を実施し、組織的に対応した。								

成	に豊かな心をはぐくみます。	問題行動・不登校問題等にかかわる児童・生徒に関するケース会議等を実施する。	3：必要な事案に対しておおかた会議を実施した。 2：必要な事案に対してあまり会議を実施しなかった。 1：必要な事案に対してほとんど会議を実施せず、組織的な対応をしなかった。	3		1：70%未満		いますか」の問いに対して否定的な回答が昨年よりも減り、13%であった。児童に対して分かりやすく納得ができる指導これからも続けていく。 生活指導面については、保護者に実態を適宜伝え、学校と家庭が連携を取っていく体制を作る。学校としては、全教職員が共通認識をもって、学校組織として指導に当たれるようにしていく。	D		
		異年齢交流の機会を充実させる。	4：「おおむねできた」と全教員が回答した。 3：80%以上が回答した。 2：60%以上が回答した。 1：60%未満であった。	2							
プラン4　体力の向上と健康の増進	スポーツに親しむ心の育成や、運動習慣の定着による体力の向上など、生涯にわたって健康増進を図る意識の向上をめざします。	「早寝・早起き・朝ごはん」月間の取組等を通して、児童・生徒や保護者に対し、望ましい生活習慣についての意識啓発を行う。	4：全教員で行った。 3：80%以上の教員で行った。 2：60%以上の教員で行った。 1：60%未満であった。	3	年度末児童アンケートの「早寝・早起き・朝ごはん」を意識した生活ができますか」で「できている」「ほぼできている」の割合	4：90%以上	1	体力向上に向けて、課題である握力と跳躍力の向上に絞って取り組んだ。後半は体を思うように動かし、児童が運動を楽しんでできるようコオーディネーショントレーニングも体育集会で取り入れた。 6月と11月の「早寝・早起き・朝ご飯」の取り組みについては、保健室前に頑張りカード（全児童分）の集計を掲示し実態をつかませる工夫をした。課題の「早寝」に加え、浅野排便の問題がわかってきたため、さらに睡眠の重要性を指導・啓発していく。毎朝の朝の調子を整えていくことで、コロナ禍においても健康で意欲に満ちた生活を児童自らが考えていくことができるよう計画をしていく。	A	4	もっともっと外遊びを啓発してください。 土日のPTAの校庭開放も活用してください。 健康の増進 プラン1の子どもの育成とも関係がある。コロナ禍で絶対必要な①手洗い②マスクを付ける③家の中で手の触れる箇所の消毒④換気を十分に⑤対面会話を避ける（家庭内）
			4：全教員で行った。 3：80%以上の教員で行った。 2：60%以上の教員で行った。 1：60%未満であった。	3		3：80%以上			B	3	
		給食指導及び教科等における指導を通して、食生活の充実・改善をねらいとした「食育」を推進する。	4：全教員で行った。 3：80%以上の教員で行った。 2：60%以上の教員で行った。 1：60%未満であった。	3							
		体育的行事、部活動、休み時間など様々な機会を通して運動習慣の確立を推進する。	4：全教員で行った。 3：80%以上の教員で行った。 2：60%以上の教員で行った。 1：60%未満であった。	2		2：70%以上			C		
		健康観察や手洗いの習慣化を通して、健康への関心を高める。	4：全教員で行った。 3：80%以上の教員で行った。 2：60%以上の教員で行った。 1：60%未満であった。	4		1：70%未満			D		
プラン5　魅力ある教育環境づくり	児童・生徒が安全・安心に学校生活を送るために、教員の指導力向上と良質な教育環境をつくります。	授業公開日の授業評価を、その後の授業改善に生かす。	4：「おおむねできた」と全教員が回答した。 3：80%以上の教員が回答した。 2：60%以上の教員が回答した。 1：60%未満であった。	3	年度末保護者アンケートの「子どもたちにとってわかりやすい授業を行っていた」で「あてはまる」「おおむねあてはまる」の児童の割合	4：90%以上	3	理科の校内研究を重点教科として取り組み、授業改善を進めるとともに、教員の授業力改善に努めた。また、校内OJT研修については、新学習指導要領の理解を深める研修を行ったため、校内全体で学ぶ機会とした。 また、ICT機器の活用にも注力し、多様な活用方法を検証し、授業に生かしていきたい。次年度のプログラミング教育への準備も進めていく。 保護者へのアンケートでは、「子ども達にとってわかりやすい授業を行っていた」という肯定的な回答が88.7%と昨年度と同程度の評価であったが今年度は「とてもそう思う」が6%増えた。今後も各教科の学力の定着に視点を置き日々の授業改善を継続する。 特別支援教育の推進については、校内委員委員会を毎月確実に実施した。児童の指導について、分析・検討し、毎日の担任の指導に生かすとともに、教員全体で指導ができるように児童理解に努めた。	A	4	理科の水溶液を調査する「考える授業」がよいと感じています。 他科目でも可能ではないでしょうか。 教育環境づくり ICT機器の活用が授業に生かされる時代となり、学校は勿論のこと家庭や地域においても勉強が必要となった。
			4：学期に2～3回（年間6回）以上行った。 3：学期に1回（年間3回）以上行った。 2：年度間に1回以上行った。 1：実施しなかった。	3		3：80%以上			B	3	
		授業改善セミナー等の研修成果を生かし、主任教諭が助言・支援を行う校内研修等を実施しOJTを充実させる。									
		各種研究発表会等の研究・研修の成果を、自身の授業改善に生かす。	4：「おおむねできた」と全教員が回答した。 3：80%以上の教員が回答した。 2：60%以上の教員が回答した。 1：60%未満であった。	3		2：70%以上			C		
		校内委員会等を確実に実施し、学校における特別支援教育を推進する。	4：月1回以上行った。 3：学期に2～3回行った。 2：学期1回以上行った。 1：実施しなかった。	3							
		「東六郷スタンダード」を校内共通の学習ルールとして徹底し、学習規律を定着させ、児童が主体的に学ぶ環境づくりを行う。	4：全教員で行った。 3：80%以上の教員で行った。 2：60%以上の教員で行った。 1：60%未満であった。	3		1：70%未満			D		
プラン6　学校・家庭・地域が一体となってともに進める教育	学校・家庭・地域が担う役割などを明確にし、地域に開かれた教育の実現を目指します。また、相互の連携を深め、子どもを育てる仕組みを作ります。	教育目標・学校経営方針・学校評価等の基本情報、児童・生徒の活動情報等をホームページ等で公開及び更新することにより、積極的に情報を発信する。	4：月1回以上更新した。 3：学期に2～3回更新した。 2：学期1回以上更新した。 1：更新しなかった。	2	年度末保護者アンケートの「学校は地域・保護者に対し、丁寧に対応している」で「あてはまる」「おおむねあてはまる」と回答した保護者の割合	4：90%以上	3	今年度はコロナ禍であったことから、地域・保護者に教育活動を見ていただく機会が非常に少なかった。その中でいただいた、保護者・地域の方々からの声に真摯に耳を傾け、誠実にかつ迅速な対応を心掛けてきた。また、情報が正しく伝わるよう吟味した。今後はホームページを有効活用し、教育活動を発信できるよう努めていく。 学校の児童の様子については、電話と対面と、必要に応じ、機会を設けて学校と保護者の双方での教育を目指した。 今後も、地域力を生かした学習活動の構築をはじめ、地域と共に子どもを育てることができるよう信頼関係を築いていくよう努めていく。	A	4	全般的にコロナ禍のため学校に行けなかったことが残念でした。 今年は大変なコロナ禍の中、地域代表としては、本当に先生方の指導は大変だったと思います。そんな中、子どもたちを見守っていただき本当にありがとうございました。今回の評価は活動を見せていただく機会が少なかったため、報告書を読んで評価としていただきます。本当にお疲れさまでした。 今年度は校内活動を見ることができませんでしたが、休み時間の児童と先生との時間を見ると、とても元気に楽しそうな姿を見ることができ、安心しました。 ホームページの内容が古いものが多く、適正に運用されていない。若い保護者も多いので更新回数を上げて生きた情報を発信するべきではないでしょうか。 共に進める教育 三位一体の教育が必要。学校、家庭、地域が各々役割を分担し、相互に課題の共有を図り、連携して協働で実践をすること。仕組み作りが必要です。
			4：毎回情報を提供した。 3：おおむね情報を提供した。 2：あまり情報を提供しなかった。 1：情報を提供しなかった。	3		3：80%以上			B	3	
		地域教育連絡協議会において、児童・生徒の変容等の具体的な資料を作成して、評価に必要な学校の情報を適切に提供し、適正な評価を受けるよう努める。									
		学校支援地域本部と連携するなどして、地域力を生かした特色ある教育活動を実践する。	4：学期に2～3回行った。 3:学期1回以上行った 2：年1回以上行った。 1：実施しなかった。	2		2：70%以上			C		
						1：70%未満			D		

〇「成果評価」は、各校が4段階で定めた成果指標によって行う。
〇記入にあたっては、各学校で取り組んでいる自己評価項目に照らし、該当する項目を取りまとめて行う。
〇学校関係者評価の「評価」は、A：自己評価は適切である　B：自己評価はおおむね適切である　C：自己評価は適切ではない　D：評価は不可能である　の4点について、評価した人数を記載する。